ワカサギ釣りで観光誘客を

大正・昭和に活躍した落語家の三代目三遊亭金馬（1894～1964）は三度の飯より釣りが好きだった。好きなんてものではない。タナゴ釣りの帰りに線路を歩き、鉄橋で列車にはねられた。事故が元で左足を切断することになったが、釣りが原因だと思われたくないから、客の前では不自由な様子を見せなかった。

金馬が楽しみにしていたのが榛名湖（高崎市）のワカサギ釣り。１月になると「氷結しました。早くおいでください」と〝督促状〟が届いたそうで、専用の釣り小屋まで預けてあった。米俵を敷き、脇には火入れ壺。戸を閉めておくと、外は吹雪なのに暖かく、快適な釣りが満喫できたという。残念なことに近年は暖冬続きで榛名湖の氷上釣りは中止の年が続く。金馬もきっと泉下でため息をついていることだろう。

ワカサギはたくさん釣れるため、釣果は１束、２束と数える。１束とは１００匹のこと。「つ抜け」といって10匹も釣れば大漁という釣りとは楽しみ方が異なる。だが、数ではなくワカサギの大きさでファンを集めているのが神流湖（藤岡市）。〝超大物〟の16㌢級が釣れ、希少性から「レアサギ」と呼ばれている。命名したのは群馬県水産試験場主席研究員の久下敏宏さん。11～13㌢を「デカサギ」、13～15㌢を「メガサギ」、15㌢以上を「レアサギ」と名付けた。愛好家がＳＮＳや釣り情報誌で発信し、呼び方が広まりつつある。

あまり知られていないが、群馬県は山上湖からため池まで約20カ所のワカサギ釣り場があり、全国屈指の「ワカサギ県」らしい。氷上釣りができる赤城大沼（前橋市）はレンタルの釣り具があり、遊びに来た親子連れやカップルも気軽に釣りができる。雪景色と凍った湖の風景は中国をはじめとする外国人観光客に人気があるという。新型コロナウイルスの感染が終息した暁には、ワカサギ釣りが冬の観光の主役になるかもしれない。

上毛新聞社　論説委員長　小田川浩道

ワカサギ釣りの愛好家でにぎわう赤城大沼

赤城大沼の雪景色。１～３月にワカサギの氷上釣りが楽しめる